伝統的で自然のある新居浜

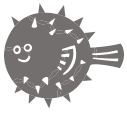
マイケル　オウエン　スミス

私は新居浜に住んで、1年半になります。その前は、本州や北海道に住んでいたので、あと九州と沖縄に住むと全部のエリアに住んだ事になります。私は、自分自身を探検家のように考えるのが好きです。だから、四国で何を見ても失望することがありません。四国には、自然とその美しさがいっぱい詰まっています。交通量の多い通りで、野生の猪の子供を渡らせるために車がキーと音を立てて停まるようなところは、日本でも他にありません。他の地域では、山を10キロトレッキングした後、無料の雉スープをいただいたことはありません。お祭りで魚を放流することに参加させていただけるなんて、どこにもありません。これらが、私の忘れられない思い出です。そのようなことが、ここにはたくさんあります。

友人が車を運転するので、自分の住んでいるところから、友人の車で、山の中を旅行します。ウィキペディアで見つけた人里はなれた滝に行くために危険な尾根に沿って運転することを要求すると、彼女はよく文句を言います。しかし、そこに到着すると、すべての行程が価値あるものだとわかります。ただ、再び、うちに戻るために、同じ危険な尾根を運転して戻るまで、ですが。。。

ちょうしの滝は、そのような場所のひとつです。川沿いを少しドライブすると山の斜面深くにある美しい場所です。これは、車のタイヤがはまるような道につながる他の川、その川と平行に流れる他の川と間違えたりすることはありません。もし、間違った道にいて、インディージョーンズのク話に出てくるようなクモに出会ってしまったり、私の友人のように明かりに寄ってきた何百もの蜂にさされて、足がきゅうりのようになったりしても、さらに歩いてあがってください。

私のもっとも最近の文化体験は、新居浜供養祭に参加したことです。新居浜の要人の方たちが集まり、新居浜の人々がいただいたふぐの命を供養する日です。毎年2月9日にこの場所でおこなわれます。日本語の'ふぐ'が、2月の2と9日の9で、'フグ'と読めるので、語呂合わせのようなものです。最初　私たちは小さな祭壇に集まり、神主さんと一緒に祈りました。神主さんは、祭壇の前に座り、深く頭をたれている市長や経営者に、木の枝を配りました。すべては、魚への畏敬の念が満ちたもののようです。それから、私たちは全員　神社から波止場まで、行進しました。そして、手袋をつけました。偶然、私は市長さんの隣に立ちました。私たちは、それぞれ、生きたふぐを渡されました。市長さんが、三つ数えたら、一斉に海に投げるようにと説明しました。私は、一度もふぐを食べたことがありませんし、食べたいとも思ったこともありません。しかし生涯において、このような名誉ある供養祭に出席してフグを放流したことがある、と言える人はそうたくさんはいないに違いありません。



イギリスには、魚をなげる慣習はありません。しかしながら、参加者ができるだけ遠くにゴム長靴を投げつけるウェリーワンギングというスポーツがあります。ウェリーは、靴を蹴って脱ぐように足先から蹴り投げます。厳格なルールとさまざまなテクニックにより、とてもまじめなスポーツになってます。私は、日本の旅行者がこの伝統的なイギリスの娯楽をどのように思うのだろうと思います。

私は、他の国の伝統にかかわることは、とても大切だと思います。また、自分自身の国を思い出すことも大切だと思います。私は、ふぐを投げるのはユニークな経験だと思う一方で、イギリスの似たような祭りを思い出しました。このように日本であなたの経験について考えたり、あなたが新しい場所を探検する時、あなたはふるさとからそんなに遠くにいると感じないでしょう。

訳：馬木　早苗（Sanae Umaki）